
シンポジウム 2

前立腺腫瘍学の変遷からひもとく進行期前立腺癌治療に求めるもの 進行期前立腺癌の根治は目指せるか？

司 会	酒 井 英 樹 (長 崎 大)
	藤 本 直 浩 (産 業 医 科 大)
演 者	井 川 掌 (久 留 米 大)
	斎 藤 誠 一 (琉 球 大)
	藤 井 靖 久 (東京医科歯科大)
	溝 上 敦 (金 沢 大)
	塩 田 真 己 (九 州 大)

司会のことば

進行期前立腺癌，特に転移性癌に対してはホルモン療法が標準的治療であるが，これは根治を意図したものではない。しかし，最近の診断法および治療法の急速な進歩は，進行期であっても転移が少数である，いわゆるオリゴ転移癌に対しては根治も不可能ではないことを期待させる。そこで，本シンポジウムでは進行期前立腺癌の根治の可能性を探るべく，5人の専門家による発表と討論を行った。

まず，久留米大学の井川掌先生より，前立腺癌の進行において中心的な役割を果たす AR axis について最近の知見を踏まえ，AR リガンド供給と AR 活性化抑制の2つの視点から発表いただいた。次に琉球大学の斎藤誠一先生より，糖鎖である SSEA-4 が前立腺癌の浸潤，再発に関連すること，tumor infiltrating immune cells にも発現を認め，前立腺癌の進行に関連する幹細胞マーカー，および治療標的としての可能性について発表いただいた。東京医科歯科大学の藤井靖久先生から

は，diffusion-weighted whole-body imaging with body signal suppression (DWIBS) 法による転移巣検索と病変部に対する標的放射線療法についての発表があり，去勢抵抗性前立腺癌の新たな治療法としての可能性を期待させる内容であった。金沢大学の溝上敦先生からは，ホルモン療法および Ra223 の治療効果だけでなく，これらにより生じる骨関連有害事象にも注意を払う必要性について発表いただいた。最後に九州大学の塩田真己先生からは，遺伝子パネル検査，遺伝子異常をバイオマーカーとした新規治療法についての発表があり，これまでとは異なる側面からの治療法の進歩が期待される発表をいただいた。

以上のように，進行期前立腺癌の治療成績を向上させ，その結果として根治を目指した診断，治療の可能性についてそれぞれの異なる方向から発表をいただいた。本シンポジウムが，日常診療に役立つとともに，今後さらなる基礎的，臨床的検討から進行期前立腺癌が根治可能な癌となることを期待したい。